

# 年代別に見る少年犯罪の傾向とその背景

山崎 初花

1. はじめに
2. 各年代の少年犯罪ピーク時期について
3. ピーク時期における犯罪傾向とその背景
4. 現在の犯罪傾向とその背景
5. おわりに

## 1. はじめに

2021年の冬頃、新宿駅南口あたりの道路を縦横無尽に駆け抜ける原付のならず者を見かけた。彼らは背中に卍を背負っており、半キャップヘルメットを頭に被るのではなく首にかけていた。ちょうどその頃、『東京卍リベンジャーズ』という不良少年たちの漫画及びアニメが流行っていた。登場するキャラクターたちも卍を背負い、半キャップヘルメットを首にかけたり、ノーヘルメットで道路を縦横無尽に駆けたりするタイプの不良少年であった。

私が見かけたならず者たちの背景には、この漫画に影響があったのではないだろうか。

本稿では、少年犯罪における犯罪の傾向をみて、その時代背景を模索していく。また、それらをもとに原因を追究し、どのような対策ができるかについて検討する。

## 2. 各年代の少年犯罪ピーク時期について

日本における少年犯罪のピーク時期は主に3つの波に分けられる。

昭和26年の第1波、昭和39年の第2波及び昭和58年の第3波である。この他にも、平成8年～10年及び平成13年～15年にも、2年中抜きされた一時的な増加がみられる。平成の一時的な増加以降は減少傾向にあり、令和3年における検挙人員は戦後最小を更新する2万9,802人(前年比7.1%減)を記録している。<sup>1</sup>総人口の増減を考慮しても減少していることが分かる。

## 3. ピーク時期における犯罪傾向とその背景

### (1) 第1波(1951年)：検挙人員16万6,433人

第1波における少年犯罪の傾向としては第二次世界大戦終了後から1955年までの窃盗罪や強盗罪のような財産犯を中心とした非行が傾向として見られる。この背景には、終戦直後の社会的混乱、道徳的退廃や経済的困窮が関係して<sup>2</sup>おり、少年のみならず成人の刑法犯も激増した。戦後の経済的混乱の象徴である配給、食糧買い出し、闇市が表すように、生活に困窮したことによる「食べるための犯罪」が横行していた。そのため、この時代の非行は「生活型非行」といわれている。

---

<sup>1</sup> 「令和4年版犯罪白書」(法務省) <[001387344.pdf \(moj.go.jp\)](https://www.moj.go.jp/keiji/kyokai/kyokai04/kyokai04_01_01_01_01_01.pdf)>

<sup>2</sup> 「昭和52年版犯罪白書」(法務省) <[昭和52年版 犯罪白書 第3編/第1章/第1節/1 \(moj.go.jp\)](https://www.moj.go.jp/keiji/kyokai/kyokai52/kyokai52_03_01_01_01_01.pdf)>

(2) 第2波(1965年)：検挙人員 23万 8,830人

昭和30年代後半から40年代初期に至る第2波は、性犯罪、粗暴犯等の多発を中心としている。この時期における強盗罪と殺人罪の増加が少年だけに見られることも特徴的だ。<sup>3</sup>この背景には経済成長が存在する。経済成長に伴う都市化・核家族化が問題になり始め、こうした社会の変化に対応できなかった少年らによる凶悪犯、粗暴犯が多発した時期である。また、前田は「60年前後に14歳から19歳となる昭和10年代後半生まれの『戦中派』と20年代初期生まれの『団塊前期』の世代が、凶悪犯、粗暴犯という重大犯罪を少年時代に最も高い率で犯した世代なのである。そして、犯罪少年達が終戦前後に生まれて昭和20年代に規範が形成されたということが重要な意味を持っている」と指摘している。<sup>4</sup>

(3) 第3波(1983年)：検挙人員 31万 7,438人

この時代は、オイルショック等により経済環境に大きな変化があり、「受験戦争」という言葉が生まれるなど、価値観の多様化が進み、経済的に豊かになった時代である。しかしその一方で、少年非行が低年齢化し、「遊び型非行」と言われる初発型非行が増加した時期である。窃盗犯が約20万人と、全体の77.2%を占めて最も多く、次いで粗暴犯、専有物離脱横領が多かった。<sup>5</sup>

1982年は、暴走族が一番多かったといわれる時期であり、万引き、オートバイ盗、自転車盗、専有物離脱横領の初発型非行で補導した少年の数は約17万人にも及ぶ。刑法犯で補導した少年の64.4%を占めている。昭和59年版警察白書〈図3-5〉の通り、58年の初発型非行で補導した少年のうち14歳以上の者についてその動機別状況を見ると、利欲による非行が63.7%を占めて最も多く、遊び、好奇心、スリルによる非行を大幅に上回っている。しかしその内容をみると、生活充当のような深刻な動機は極めて少なく、ごく単純な動機が大半を占めている

この頃から犯罪少年と親との明確に不良な関係が指摘されるようになり、親子の断絶という言葉がよく使われるようになった。前田は、この時期の少年犯罪の対象年齢となる60年代後半に生まれた世代が団塊世代の二世であることを指摘している。<sup>6</sup>学校が荒れて犯罪が多発したこの時期は、少年たちの規範形成期が高度成長完了後であり、第1波などに比較して圧倒的に貧困経験の乏しい世代であるといえる。しかし、経済的基盤の矛盾が少年の犯罪性向として現れたというよりも、高校進学率の増加などの影響もあり、中学校・高等学校の段階での不適応の少年の増加がみられ、さらに家庭の規範維持力の弱体化が進行した時期と言える。核家族化が進行し、「ニューファミリー」がもてはやされた時代であった。母親の社会進出に伴い、母親から見て学び、コミュニケーションをとる時間が減少したことが少年非行の増加につながったと考える。

(4) 平成8年(1996年)以降の一時的増加

バブル経済の崩壊により社会経済が大きく変化していく中で、「親父狩り」と言われる路上

---

<sup>3</sup> 前田雅英『少年犯罪一統計からみたその実像一』（東京大学出版会、2000年）72頁。

<sup>4</sup> 前田・前掲注(3)76頁。

<sup>5</sup> 「昭和59年版警察白書」（警察庁）〈[昭和59年 警察白書 \(npa.go.jp\)](http://npa.go.jp)〉

<sup>6</sup> 前田・前掲注(3)96頁。

強盗、「普通の子」が突然凶行に及ぶという凶悪犯罪が多発して社会的問題となったのがこの平成8年頃である。1997年には少年法2000年改正の背景となった「神戸連続児童殺傷事件」が起きた。また、「栃木リンチ殺人事件」等、他にも様々な事件が検挙された。2000年以降も、「バスジャック事件」、「長崎男児誘拐殺人事件」や「佐世保小6女児同級生殺害事件」等凶悪事件が多発した。

この時期には、校内暴力事件やいじめに起因する事件の増加、児童虐待等も特徴として挙げられる。また、インターネットを使えるようになったのが1995年からであり、普及し始めたのはちょうどこの頃であることも特徴的である。第3波でもいえることであるが、情報化社会への変化は少年犯罪に大きな影響を与えると考える。59年の平成天皇御成婚がテレビ時代の開幕を象徴するとされ、62年にはテレビ受信契約が1000万台を突破している。そして、視聴率競争で放送内容が俗悪化し、子供に深刻な影響が生じだすのは70年代以降だと考えられる。親と過ごす時間が少なくなるのとは対照的に、親とコミュニケーションをとらなくなる子供は、テレビやインターネットを見て学び、それを模倣するようになる。そのため、テレビやインターネットで俗悪的な内容を発信すれば、子供はそれが悪いことだとは気付くことができずに、「正しい基準」として認識してしまう。平成以降の少年たちは、インターネットやテレビに基づいた「正しさ」によって犯罪に手を染めるのではないかと考えた。

#### 4. 現在の犯罪傾向とその背景

現在の少年非行として話題となっているのが、特殊詐欺の受け子、サイバー犯罪、トー横キッズなどのワードである。

オレオレ詐欺等の特殊詐欺は、和岩3年12月末の時点で検挙・補導された少年は130人で、前年同期比14人増加し、少年が占める割合は17.7%と、少年の関与が大きな社会問題となっている。また、トー横キッズなどは今では全国展開し、大阪の道頓堀のあたりに集まる少年達がいるようだ。

彼らの情報のもとやはりインターネットだと考えられる。景気の悪い現代社会において、GPS機能の付いたスマートフォンを子供に持たせておけば共働きの親御さんでも安心の時代である。しかし、スマートフォンを持たせるうえでのリスクも生じる。SNSの普及によって、世界中の人と会話をすることが可能になったが、それによって誘拐事件も発生した。また、法律違反行為以外にもコンプライアンス違反だと晒され、デジタルタトゥーとしてこの先ずっと残っていき、ひどい場合には住所や学校を特定される時代になった。

私は、SNSをメディアリテラシーが十分でない未成年に使わせる場合には、年齢確認をより徹底すべきだと考える。実際に年齢確認や本人確認をマイナンバーや運転免許証などの身分証明書によって行っているアプリはある。マイナンバーカードの取得を促進されている現在、難しい話ではないと考える。テレビもコンプライアンスに厳しくなり、過激な内容の放送がされなくなってきている。SNS等のインターネットでも同様の対策が必要である。

#### 5. おわりに

以上のように、少年犯罪の年代別傾向とその背景について検討した。基本的にどの時代においても手軽に行える万引き等の窃盗は検挙数が多いが、経済的困窮が顕著な時代はその数も一気に

膨れ上がる。少年犯罪に直接起因する社会問題というのは、経済的な問題だと言える。

また、第2波、第3波で述べたように、団塊世代が影響したことを考えると、やはり親子間の関係や教育、コミュニケーションが少年達に与える影響は大きい。情報化社会が進んだ現代において、ネットの情報の精査が難しい少年たちに大人が正しい基準を設けることが大事だ。